

調査報告

## 認知症患者における離床阻害因子の検討

認知症患者は特有の症状をもち、離床の阻害因子となりうると考えられる。今回、認知症患者における離床阻害要因について調査したので報告する。

### 方法

調査期間：2018年3月17日～3月27日  
 調査対象：日本離床研究会教育講座の参加者のうち回答の得られた医療従事者627名  
 対象職種：看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士  
 調査方法：質問紙（配布）

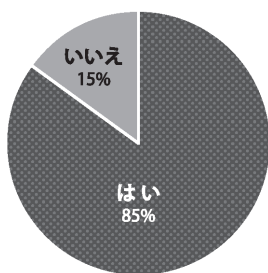
#### ●設問

- Q1. 認知症は離床の阻害要因と感じますか。  
 Q2. はいと答えた方、どんなことが離床に特有の阻害要因だと考えますか。（複数回答可）

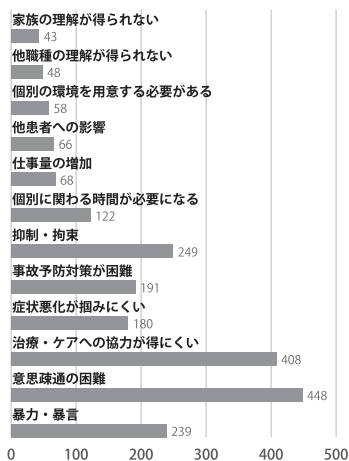
#### ●回答選択肢

- Q1. 1. はい 2. いいえ  
 Q2. 暴力 / 暴言・意思疎通の困難・治療 / ケアへの協力が得にくい・症状悪化が掴みにくい・事故予防対策が困難・抑制 / 拘束・個別に関わる時間が必要になる・仕事量の増加・他患者への影響・個別の環境を用意する必要がある・他職種の理解が得られない・家族の理解が得られない

### 結果



結果1 認知症は離床の阻害要因と感じるか



結果2 離床に特有の阻害要因はなにか

### 考察

結果1より、85%が認知症が離床の阻害因子になると回答した。認知症患者の心理症状、行動障害は介護負担が増えるとされているが、離床する場合も同様に阻害要因になると考えられる。結果2より、回答の多かった項目は、「意思疎通の困難」、「治療・ケアへの協力が得にくい」であった。

問題行動への対応について、片丸ら<sup>1)</sup>は文献検討から効果的な介入法を調査している。その結果「なじみの関係をつくる」「安定した場所の確保」「行動症状・心理症状の背後にある要因をアセスメントする」など、8つを挙げている。

一例として、「なじみの関係をつくる」という介入に関し、認知症患者と顔なじみになるため、急に話しかけるのではなく、少し距離を置きながらゆっくりと近づいて話をする方法で返事が返ってくるようになり、笑顔が見られるようになったとしている。この例のように、問題行動を改善することで、医療者が離床しやすい環境が整うものと考えられる。今後は特有の阻害要因に対し、上記介入法の効果を検討することが課題である。

### 文献

- 1) 片丸 美恵, 宮島 直子, 村上 新治: 精神科看護における認知症高齢者のBPSDへの対応と課題-「問題行動」をキーワードとしたケーススタディの文献検討から. 看護総合化学研究会誌, vol.11(1), 5, 2008.

著者情報：土屋 研人 \* 飯田 祥 \* 黒田智也 \* 曷川元 \*  
 \* 日本離床研究会 学術研究部